

やくざ節唄の唄

見えるふるさと戸毎の灯り

ひとつ二つと数へた少年こゝろの

思出戀し峠に立てば

寒や月さへ濡れかゝる。

戀し母御よ、おふくる様よ

達者で御座りよかひと眼でよいが

逢ふに逢へないやくざが祟る

追はれ故郷よ、ふるさとよ。

やくざ意地なら人をも斬るが

義理と人情の絆は切れぬ

これが未練か、男の涙

結ぶ草鞋の紐に散る。

明日は何處ぞ、のつ月様よ

空の鳥さえ塹はあるに

男一匹、安居の宿を

尋ね行く行く三度笠。

(昭和十年「山桜」二月号)